

## 源氏物語第二部の主題性について

森

一

郎

若菜の巻以後いわゆる第二部の世界は女三の宮の登場によつてはじまる。その登場のしかたは、人物紹介にはじまるもので、かなり改まったものといへば、さりげない登場というようなものではない。たとえばこの第二部の物語に重要な役を演ずる一人である柏木の登場(註一)はまことにさりげないものであったことを思い合わしたい。これだけで、だから、というのではないが、女三の宮は、新しく物語りはじめられた世界の重要な役割にならぬ人物であることとを予想させられる。特に光源氏への降嫁が、作者の丹念な筆によつて語られるとき、光源氏の愛情生活に大きな変化をもたらすことを予想せしめて、事はまことに重大なるを思わせられる。

新しく物語りはじめられたこの事件(女三の宮降嫁)は、一体いかなる意味を物語の世界にもたらすものなのか。われわれは、今まで、この物語の主人公光源氏と女主人公紫上の並びなき理想の二対生活を見てきた。藤裏葉のめでたき大団円ということ、光源氏の愛情生活について言えば、この紫上とのめでたき一対を頂点とした六条院の調和ある愛情生活ということであった。ところが、こゝに、朱雀院最愛の皇女という申し分なき身分をもつて、女三の宮が久しく空席であつた光源氏の正夫人におさまることとなつたのである。紫

上はもはや六条院の女主人ではいらなくなる。これは六条院の愛情生活の一大事件であるとともに物語の世界の一大変容でなければならぬ。なぜならば光源氏と紫上の並びなき理想の一対というめでたき世界が打ちくずされるのだから。甘くめでたき世界の崩壊、新しく物語りはじめられた世界は、そのような精神構造において出発しているといえそうである。ところで、こゝに新しい物語の展開のさし示すところは、源氏と紫上に起る変化、特に紫上の身の上の変化を予想せしめるのであるが、事は外面的な変容に止まらない。紫上その人自身の変化を予想せしめるのであつて、全く内面的な問題である。こゝに、女三の宮の光源氏への降嫁という物語の展開の焦点は紫上にあると思われる所以があるとともに、物語の主題のありかもまたその内面的な事柄、紫上の心理の内側にあるであろうことを考えさせられるのである。女三の宮の降嫁という事件の意味は、まずはそこにあるであろう。このことを見通しとして持つのである。

理想の一対のくずれゆくところ、光源氏もまた今までの光源氏ではあり得なくなる。したがつて、第二部のいわゆる新しい世界、進歩といわれる点は、女三の宮の登場によつて新しく変貌する光源氏と紫上の像に見られると言つてもよいであろう。光源氏と紫上と女三の宮とが作りなす六条院の愛情生活のうちに物語の新しい世界は

かたちづくられるのであり、そこにははらまれる問題性をあとづけることよって、第二部の世界の意味は明きらかにならう。

因みに、これは、この物語を読む時の読者の素直な興味と軌を一にする。第一部以来の読者なら誰しも、女三の宮の光源氏への降嫁という事によって思いやるのは紫上の身の上であらう。王朝の読者、女君たちの読み方を想像するならなおさらである。いわば実質上の正妻、光源氏の最愛の女性としての幸福を一身になつてきた紫上の受ける打撃を思いやらずにはいられないであらう。また、女三の宮の降嫁によつて光源氏は紫上と女三の宮に對しどのようにしていくのであらうか、という光源氏の態度もまた読者の強い関心の的となるであらう。言いかえれば三角關係への興味という通俗的なことがらであるが、作品はどのようにこたえてくるであらうか。問題は女三の宮降嫁事件の中にすでにその可能性、萌芽をのぞかせている。論述もまたそこからはじめねばならない。

## 二

女三の宮の光源氏への降嫁はきわめて客観的な叙述でその必然性が語られており、あの場合光源氏が最も理想の相手であることを納得させられる。作者の丹念な叙述はあらゆる角度からみてその必然であることを描述してきわめて説得的である。

ところで、しかし、これには危懼される点、將來に問題の起りそなうな事があった。まず危懼されることとして紫上の存在がある。このことは作中人物の左中弁の言葉として、その危懼が語られている。「御宿世ありて、もしさやうにおはしますやうもあらば、いみじき人(紫上)と聞ゆとも、立ちならびて、おし立ち給ふ事はえあ

らじとこそは推し量るれど、なほいかかと憚らるる事ありてなむ覚ゆる。」(若菜上二八五頁。頁数は、吉沢義則博士著「対光源氏物語新釈」による。以下同じ)。源氏に親しく仕えている者、すなわち六条院の事情に通じた者の言葉としてその確度は高いと見なければならぬ。事実、弁が語つた六条院における源氏の愛情生活は、読者のよく知るところである。紫上の存在はまことに大きいのである。だから、朱雀院や女三の宮の乳母が、多くの婦人たちの中で女三の宮がいやな思ひをすることがあらう、と危懼したのは、外部からの抽象的な、具体的な核心を欠いた、不安にすぎなかつた。朱雀院は、紫上をとりたてて考慮してはいられない。朱雀院は紫上の存在についての認識に欠けるところがあつた。その存在を小さく見すぎていられるとわれ／＼は思ふのである。朱雀院から見れば、多くの女性の存在は氣にかゝつたが、紫上を含めてそれらの人たちの身分という点で軽く考えられたところがあるようだ。それは冷泉院には躊躇されたことでわかる。冷泉院には秋好中宮(源氏が後見)をはじめ弘徽殿女御(もと頭中将、太政大臣の娘)らいずれも身分のある人ばかりがおられるので躊躇する旨を朱雀院が語つていられる。「はか／＼しき後見なくて、さやうのまじらひいとなか／＼ならむ。」(若菜上二八二頁)という朱雀院の言葉は当時の常識であり、院として当然のことであつたようである。氣弱な院は源氏をはじめ力ある人々に氣おされていられる。朱雀院は身分ということを重く見ていられる。それは婿がねについての審査の態度と全く軌を一にする。冷泉院を思い浮かべられた右の言葉のすぐ前に「たゞ人のなかにはありがたし」といふ、短く簡潔な表現なるがゆゑに、院にしては珍しいほどの断定的な強い調子の言葉があり

(註2) 婿がねの具体的な批評でも、身分を第一に重んじている。蟹兵部卿宮に対して「人がらは目やすしかし。同じ筋にて、他人とわきまへおとしむべきにはあらねど……。」(若菜上二八九頁)と、

人品(すなわち身分をさすであらう)はよく、皇族であることは重んじている。また、藤大納言を批評して、実直な愛情は認められるけれど、普通の地位に難色を示し平凡な身分を難する語氣は強い。「さる方に物まめやかなるべき事にはあなれど、さすがにいかによや。さやうにおしなべたる際は、なほめざましくなむあるべき。昔も、

かやうなる選びには、何事も人に異なる覺えあるに、事寄りてこそありけれ。只偏へに又なく持ち居む方ばかりを、かしこき事に思ひ定めむは、いと飽かず口惜しかるべきわざになむ。」(若菜上二九〇頁)。柏木は「位など今すこし物めかしき程になりなば」許しても、と思われ、やはり何よりも身分、地位を問題にしている。なお

年齢が若いということを難点にしていられるが、指摘されているように(註3) 柏木はこのとき二十四、五歳であり、十八歳の夕霧を候補にあげたことを思い合わすと、おかしいわけだ。しかし、これも夕霧が源氏であること、従三位相当の中納言であるのに比べ、柏木は従四位下相当の右衛門督であること、すなわち身分が問題になっているわけで、「まだ年いと若く」というのも皇族の流れでない臣下で位低く貫録のないことに結びつくがゆえに問題になっているのだ。したがって、院が「まだ年いと若く」と柏木の年齢を口にされたのは、夕霧を思い合わすことによって、年齢自体が問題になっているのではないこと、身分が問題になっていることを明らかにし得、院の考え方をいっそう明白にすることとなつたわけだ。

かゝうな朱雀院の結婚観は、朱雀院のみの特殊なものではなかつ

た。女三の宮を望む候補者にしてからが、院の鍾愛する姫宮ゆえに熱を上げているのだ。誰も本人を實際には知りはない。尤も院の鍾愛から推して美しい方だろうと思つたり、また、うわさに聞くといふことはあつたらうけれど。要するにこれは当時として普通のことだつた。光源氏も最愛の紫上がありながら、身分ある女を望んでいるらしいこと、このことは見落してはならないことである。女三の宮の乳母が朱雀院に申し上げる言葉の中に「かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしくおぼしたる心は絶えず物せさせ給ふなれ。そのなかにも、やんごとなき御願ひ深くて、前齋院などをも、今に忘れがたくこそ聞え給ふなれ。」(若菜上二八二、三頁)とあり、源氏が、身分のある女を望んでいるらしいことがわかる。また、左中弁が妹、女三の宮の乳母に語る言葉の中に、源氏が語つた言葉として「この世の榮え末の世に過ぎて、身に心もとなき事はなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬ事もある」とあり、「わが心にも飽かぬ事」とは、左中弁の言によれば、身分のある女がないということであり、弁は、女三の宮降嫁ということになれば「いかにたぐひたる御あはひならむ」と言っている。同じ会話の中で、一方に紫上の存在を懸念しつつ、一方にこのように言っているのだが、私は、いずれもまことに妥当な見解であつたと思う。その意味はこうだ。前者はこれまでの源氏と紫上のためたき限りの結びつき、愛情生活を見てきたわれわれとして当然そう思うことであり、後者は、准太上天皇の正夫人として紫上は身分という点で女三の宮の比ではなく、身分という点ではまことに申し分なき一対として女三の宮降嫁は考えられるのである。弁のことはまことに客観的なことと言つてよい。

はじめに危懼される点があるといったのは言うまでもなく女三の宮にとっての意味であったのだが、それが愛情という内的なことからであったがゆえに、六条院の外部からは的確な見通しを欠いたこと、それゆえに朱雀院としてこの見落しは止むを得ないところであったこと、のみならず、身分という点でまことにふさわしく紫上とは格段の高さであったがゆえに、いっそう紫上の存在に対する過小評価が生まれた、というより核心をついた願望は全然なされなかつたことを、以上によってほど明きらかにし得たと思う。

源氏が女三の宮のことを「承け引き申し」てから、紫上にそのことを語ったとき、紫上は「いとつれなくて、」次のようなことを言った。「(前畧)ここには、いかなる心を置き奉るべきにか。『めざましくかくては』などがめらるまじくば、心安くてもはべりなむを、かの母女御の御方さまにても、うとからずおしかずまへてむや。』と「卑下し給ふ」たのである(若菜上三〇五頁)。これはあながちひねくれた言い方ではなく、この時すでに紫上は女三の宮の身分に任せられ、女三の宮降嫁の衝撃を受けていたのである。

紫上を襲ってくる不安の方が切実であったのだ、と言つてよいのである。しかし、物語の読者として紫上の人柄の魅力、源氏をひきつける力の大きさを知らぬものとして、女三の宮にとっての懸念たるべき紫上の存在を大きく考えるわけなのであった。

### 三

朱雀院は鍾愛する女三の宮のために父として婿えらびに限りなく心をくだかれるのであるが、院が源氏をと思ふ気持には、宮のため

にという配慮はもちろぬあるが、院自身が源氏に惚れ込むという点が多分にあった。それは光源氏の理想性に関係してくることがらであるが、源氏の色好みぶり、その風格を讚美する心であった。

女三の宮の降嫁について朱雀院側が危懼したのは六条院の多くの女性たちの存在であったが、それはすなわち光源氏の好色性を危懼することではなければならぬであろう。院自身「いで、その古りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ。」と言っているのである。しかし、その源氏の好色性こそは源氏の限らない魅力、風格であつて、物語の本文は、右の院の言葉を「とは言はずれど」とつゞけて、「げに……」以下、院の心中を、源氏に女三の宮を託そうと思つていらつしやるようである、と述べ、次に「誠に、すこしも世づきてあらせむと思はむ女子持たらば、同じくはかの人のあたりにこそは触ればはせまほしけれ。いくばくならぬこの世の間は、さばかり心ゆく有様にてこそ過ぐさまほしけれ。われ女ならば、同じ兄弟なりとも、必ず陸び寄りなまし。若かりし時など、さなむ覚えし。まして女の欺かれむは、いとことわりぞや。」と院が言うた、とある。これはまことに源氏の魅力への深い傾倒であり、好色者の魅力、風格への限らない礼讚であった。「いくばくならぬこの世の間は、さばかり心ゆく有様にこそ過ぐさまほしけれ。」は、常の人格の英雄への讚美である。これは普通の人格のまねできぬことであつた。この限らない魅力、風格は、たとえ夕霧などの「まめ人」にはないものであつた。その魅力は、「古りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」という院の懸念を院自身消し去つてしまわれたかのごときほどのものなのだ。石田穰二氏は、「女三の宮が六条の院の人となるについて、その最も大きな原因は、光源氏が色好みである

といふことでなくてはならない。げんに、夕霧の場合の最大の難点  
は、彼が、雲井の雁一人を大切に守ってわき目もふらぬまめ人なる  
点にあった。」(註4)と言われたが、まさしく夕霧の場合、彼が  
「まめ人」であることが彼自身をして消極的ならしめるとともに、  
他から見ても余地のないものに映ったのだ。源氏はこの女三の宮の  
ことには消極的な態度であったが、それは別に紫上を顧慮してのこ  
とではなかったようだ。尤も承諾してしまつてから紫上を気にして  
はいるが、婿えらびの間はそれを顧慮したところは見えぬ。夕霧が  
雲井雁に物思いをさすまいと自制したことを思い合ふすならば、女  
三の宮が降嫁して「三日が程」淋しげな紫上を見て源氏が心の中に  
「などで、よろづの事ありとも、又人をば並べて見るべきぞ、あだ  
しく心弱くなりきにけるわが怠りに斯かる事も出でくるぞか  
し、若けれど、中納言をばえ思しかけずなりぬめりしを」と思うた  
のは的確な自己批判であつたわけだ。源氏が色好みであることが自  
らを動かすこともなり、かつまた他から見ても望みを持たしめるこ  
ととなつたのだ。源氏は消極的であつたが、そのわけは、朱雀院と  
さして交らぬ年齢ゆゑに引き受けかねるということ、死別してのち  
の後世のさわりとならうということであつた。この年齢ということ  
は、その思慮分別とあいまって女三の宮の心おさない性質を思えば  
親がわりということでも朱雀院から見ればむしろ頼りになるところで  
あつた。年よりも若々しく、色つやはいっそ増してきた美しさを  
思えば、(朱雀院の言葉に「誠にかれはいとさまざまなりし人ぞか  
し。今は又その世にもねびまさりて、光るとはこれをいふべきにや  
と見ゆる匂ひなむいとど加はりにたる。」——若菜二八〇頁——と  
ある。)老いなどは感じられぬところであつたらうことが年齢とい

う言いわけを不能にしたと見られるが、しかし、源氏に断りきる心  
があれば、この理由は他者を肯わしめるものがあつたはずだ。源氏  
は、「この御子(三の宮)の御母女御こそは、かの宮の御はらから  
に物したまひけめ。かたちも、さしつきには、いとよしといはれた  
まひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮、おしなべての  
際にはよもおほせじを」と言つて、かの藤壺宮ゆかりの三の宮を美  
しい人だろうと想像しており、作者は「いぶかしくは思ひ聞えたま  
ふべし。」と言つてゐる。どんな女だろうかという関心だけは持つ  
たようだが、というのである。やはり「あやにくの御心」は今も変わ  
らず、老いを意識しつつ自らの好色心——女性を求めぬ心——をお  
さえることができないのであつた。その言動が消極的であつたが故  
に好色心の否定を見るのは正しくないであらう。昔のように何を  
考えずに飛び込んで行けた若さを持たぬまでのこと、質の変化をこ  
そ考へるべきところなのだ。たしかに道心は深まりゆくように見え  
る。けれどそれを底に宿しつつ、ゆらめきつつ、なお「古りせぬあ  
だけ」であつたのだ。このことは女三の宮の乳母が朱雀院に語つた  
言葉「かの院(源氏)こそ、(中略)人をゆかしくおぼしたる心は  
絶えず物せさせ給ふなれ。」などが明白に証明してゐるところであ  
らう。

光源氏は自らの好色心から新しい事態を六条院にもたらすことと  
なつたのだ。

ところでこの源氏の好色の性格は周知のごとく帝木卷冒頭に述べ  
られてゐるごときものであつた。交野少将のようにひたぶるの風流  
一途のものではなかつたのだ。そして關係した女性はずべて見捨て  
ることなく最後まで面倒を見るという誠意の裏付けがあり決して奔

放なものではなかった。豊兵部卿宮がその風流一途の軽びたる好色性のゆえに朱雀院によってしりぞけられ、源氏の好色が「その古りせぬだけこそいとうしろめたけれ。」と言われながらも大きく肯われている所以である。特に、源氏は今やその年齢とともに「物の心え」があり、「のどかに落ちゐて、大方の世のためしとも、うしろやすき方は並びなく物せらるる人なり。」（朱雀院の批評。若菜上二八九頁）と言われる人だ。前に述べたように朱雀院が限りなく讚美した源氏の好色性はこれらと一つのものとしての人格として考へるべき理想性であった。

#### 四

いよ／＼女三の宮が六条院に降嫁し、その盛大な儀式は全く紫上の存在を無視している。こゝに紫上の苦惱がはじまり、昨日に変わる今日の没落がある。世はまさに無常である。この無惨な没落は、比ぶべくもない身分に圧せられたものであることは明らかなだ。しかしそれ以上に、今まで信じてきた光源氏の心、きずきあげてきた二人の愛が、無情にもくずれていくことに対する嘆きこそ本質的なものではなかったか。「目に近く移ればかはる世の中を行末とほく頼みけるかな」と彼女は書きつける。「年頃、さもやあらむと思ひし事ども、今はとのみもて離れたまひつつ、さらばかうにこそはと打解けゆく末に、あり／＼てかく世の聞耳もなのめならぬ事の出で来ぬるよ、思ひ定むべき世の有様にもあらざりければ、今よりのちも、うしろめたうぞおぼしなりぬる。」（若菜上三一七頁）と紫上の心中を物語の本文は綴る。これは光源氏の好みに対する不信の念である。随月夜尙侍との再会は光源氏の色好みの変奏曲である。しか

し、紫上は以前のように嫉妬しなかった。「姫宮の御事のちは、何事も、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。」（若菜上三二九頁）と作者は書いている。女三の宮を六条院に導いた二つの大きなもの、光源氏の好みと、三の宮の身分という力によって、今、紫上はうちくだかれ、みじめにも圧倒されていく。女三の宮の降嫁という物語の筋立ては、第一部における幸福な理想の女性、紫上を、その幸福の楽園から引きずり出さんがためであったかのように見える。事実、物語の展開は紫上のみじめな敗北を描くのであり、この紫上の苦惱こそ第一部に見られなかった新しい物語の世界なのであった。

しかし、女三の宮降嫁以後、紫上を讀める文章は、女三の宮のあまりにも心おさない性質との対比の上に、くりかえし／＼書かれるのである。女三の宮を得てからの光源氏は「かれは（紫上は）ざれていふかひありしを、これは（女三の宮は）いといはけなくのみ見えたまへば、（中略）いとあまり物の榮なき御さまかな。」（若菜上三一五頁）と思わねばならなかった。「院に聞召さむ事もいとほし、このごろばかりつくらはむ、とおぼせど、えさもあらぬを、さは思ひし事ぞかし、あな苦し、」と思わねばならぬほど、源氏は女三の宮に対してあまり愛情を抱けぬのだ。源氏の四十の御賀や明石の姫君の御産のことは、物語というものが個人を中心とした一門の榮華の物語として系図の態度で書かれているからであろうが、（註5）女三の宮事件の物語としても意味がないわけではない。阿部秋生博士は女三の宮事件に対してこれという積極的な役割を果しているとは考えられない（註6）、としておられるが、清水好子氏が言われているように、御産のところで源氏が明石姫君に紫上の継母

としての誠意を説くのは、紫上譚美のヴァリエーションであり（註7）、女三の宮事件の物語に対して積極的な意味を持つのである。

明石の上が「さもないとやんごとなき御志のみまさるめるかな。げにはた人より殊にかくしも具したまへる有様の、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ。宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡りたまふ事も、えなのめならざめるは、忝きわざなめりかし。同じ筋にはおはすれど、いま一際は心苦しく」（若菜上三七六頁）と言った藤口は事の真相を見事についているのである。これは若菜上の巻も終りに近いころの状態である。

このことは何を意味するのであろうか。紫上は敗北してはいないのではないか。真実には紫上がやはり六条院第一位の夫人だということではないか。とすると、紫上はその人柄の魅力のみによって、身分という力にうち勝つたのだと言える。作者は紫上の存在をきわめて重んじていると言えよう。これは人柄の魅力とその魅力による愛の力を重んじようとする作者の態度を示すのであろう。

けれどまた、それでは紫上は勝ち誇れるのであろうか。ことからの性質はそのようなものではないようである。右の紫上の愛の勝利ともいふべきことは光源氏の後悔する心を通してその好色心に無言の抗議をつきつけているのだとも言えそうである。すでに女三の宮降嫁の時に受けた彼女の傷は光源氏の色好みへの不信ということではなかったか。前に引いた彼女の心中のことは（若菜上三一七頁）は信じてきたものに裏切られてこれから先が信じられなくなっている心であった。これはもう男を中にはさんで、嫉妬しあらそう女の勝ったの負けたのという世界を超えたものである。事実、紫上と女三の宮は対比的には描かれるが、対立して争うようには書かれていな

い。女三の宮は高い身分という力に守られているが、第一部における弘徽殿女御のような悪玉として描かれてはいない。むしろ女人の哀れを感じさせる弱々しい人である。この人は柏木という男の情熱にとりつかれたことから、ついには尼になってしまふのだ。紫上と女三の宮は同性として共に男の好色に苦しめられ、やがて背を向けることによって男の好色心に暗い影をもたらすことにおいて一致する。こゝに男というその典型は光源氏である。

女三の宮降嫁以後光源氏の色好みは四十の御賀などはなやかな権勢の生活を背景に、臘月夜尙侍との再会という交奏曲をも加えながらいよ／＼豊かであった。四十の御賀は彼の色好みを支える豊かな生活として女三の宮事件の物語にも意味を持つのだと思う。こゝに言う女三の宮事件とは、紫上に対する関係におけるそれである。彼は女三の宮の心おさなさに対しても、「なま口惜しけれど憎からず」（若菜上三三四頁）思う。物語の文章はそれを、「昔の心ならましければ、うたて心劣りせましを、今は、世の中をみなさま／＼に思ひなだらめて」と評している。若き日の好色とははるかに進んだ境地なのだ。葵の上と不和であった若き日の光源氏。この誇り高き正夫人をその死においてしか心の交流を感じ得なかった未熟な光源氏であったのだが、今や、女三の宮のごとき心おさない姫宮を彼はお／＼に包もうとするのだ。「いとよく教へ聞え」（若菜上三七八頁）、「この宮をばいと心苦しく、をさなからむ御むすめのやうに、思ひはぐくみ奉」つた（若菜下二四頁）。女三の宮の兄皇太子が即位されると、姫宮は「いよ／＼花やかに御いきほひ深ふ。」（若菜下二二頁）。源氏は朱雀院や帝の手前「わたり給ふことやう／＼ひとしきやうになりゆく。」（同頁）のちに柏木との密事を知

るや、「うち」の志引くかた(紫上)よりも、いつくしく疼きものに思ひはぐく(若菜下九三頁)んだものを、という源氏の思いがあるように、彼はつとめて姫宮を大切にしたのだ。このような四十代の円熟した光源氏の色好みは紫上の忍従とあいまって、女三の宮降嫁後の事態の円満な推移を促すものとなっている。危懼された三角関係は破綻を見せなかつた。第二部は、紫の上の苦悩とともに、この光源氏の成長し深まりを示した色好みを描くことにおいて、第一部とは異質であり、進歩していると思われる。

私は、女三の宮降嫁によつてもたらされるものを紫上と光源氏の人間像にあるとの理解に立つて、女三の宮事件の物語としての物語前半を読みすゝめた。私は、女三の宮登場の意味はこれで一応完結していると思う。

## 五

ところで、作者は次いで柏木事件を用意した。女三の宮事件の物語としてこの事件は劇的でもあり、また第一部藤原事件を連想させる点からも、従来から大きくとりあげられてきた。しかし女三の宮事件の物語として、女三の宮降嫁によつてもたらされた紫上の苦悩はそれにもまして大きな意味を持つ事件だと考えられる。光源氏と紫上と女三の宮の關係の推移に示された内面的な世界の意味を素通りして柏木密通事件に赴くことは許されない。女三の宮を新しく物語に登場させ物語を展開させた意味はむしろ主として物語前半にあるのではないか。拙稿をものした所以である。

(註一) 少女の巻。

(註二) 石田穰二氏は「若菜の巻について」(「国語と国文学」昭

和三十年十一月号)で、「断定的に聞える判断」と言われた。(註三) 今井源衛氏「女三宮の降嫁」(「文学」昭和三十年六月号)。ただし、今井氏は、柏木二十二、三歳、夕霧十七歳とさ  
れている。

(註四) 前掲「若菜の巻について」。

(註五) 折口信夫博士「日本文学史ノートⅡ」(「小説、物語」)の項。

(註六) 阿部秋生博士「源氏物語研究序説」下一〇〇〇頁。

(註七) 清水好子氏「源氏の女君」(三一書房刊)九九頁。

附記、なお拙稿をものするにあたって、玉上琢歌先生の日頃の御導き、清水好子氏の右の御著や石田穰二氏の前掲御論文はじめ諸先学の御論考に導かれるところ多かつた。深く感謝申し上げます。(昭和三十四年九月二十七日)

(大阪府春日丘高校)